

かささぎ通信 第111号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2022年 2月 11日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二二年一月の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』(1931.11)の「三條中納言」と、少国民文芸選『かささぎ物語』(1942.8)(帝国教育会出版部)の「鰻」の読み比べをしました。

『赤い鳥』(1931.11)掲載の「三條中納言」は「むかし、三條中納言といふ、やせつぼちで評判のお公家様があました」という書き出しで始まり、次のような構成になっています。

(一)三條中納言が何と太ることは出来ないかとお抱え医師の丹波重秀に尋ねると、ウナギとツバナを食べることを勧められます。

(二)その効果があつて、今度は歩けないほどに太り過ぎたので、再び医師に相談すると、程よく痩せるために水飯を食べるように言われます。しかしその量たるや尋常なものではなく、水飯を何杯もお代わりし、さらに白瓜やすし鮎などをたっぷり添えて食べる様子を見た医師があきれかえるほどでした。

(三)その後、あんなに食べ過ぎたウナギにとりつかれたのか、中納言は夜も昼もウナギの鳴き声に責められ続け、食も進まなくなりしました。

(四)またもや呼ばれた医師は中納言の姿を見て、妙薬を差し出しますが、実は中納言には薬の必要はなく、眠れなかった五日の間に程よく痩せていたのでした。

この話の典拠については「森三郎の作品を読む会」通信8号、「かささぎ通信」82号です。報告したように、「万葉集」巻八「五〇、巻十六3853,3854」の歌、『今昔物語集』(巻二十八の二十三)『宇治拾遺物語』(巻七の三)にも同文的同話ありの説話から題材を採っています。森三郎はこの話を、『かささぎ物語』(1942.8)(帝国教育会出版部)では「鰻」とタイトルを変えましたが、話の構成をもう一度振り返ってみると、三郎の意図が浮かんできます。

話の構成中の(二)は『今昔物語集』の中の太り過ぎた「三條中納言」が水飯を食べるといふ話をそのまま子ども向けに書き改めています。森三郎の獨創性は、元々はやせつぼちだった三條中納言がなぜ太り過ぎにな

ったかのいきさつを『万葉集』の歌にある「芽花(つばな)」(巻八)、「鰻(うなぎ)」(巻十六)にヒントを得て書き起こした(一)の部分にあります。そして(三)の部分は再び(一)のウナギとの関連で展開させ、四では中納言に進言する医師を三たび登場させてまとめているという構成で、全体を通して「ウナギ」が話の展開に重要な役割を担っていることが分かります。

医師の名前は「和氣重秀」となっている原典はあるようですが、「丹波重秀」としたのは三郎が「丹波」姓になっている原典を読んだのか、平安時代の医家である和氣・丹波両家の姓から採ったのか分かりません。しかしこのことによつてむしろ、三郎が『赤い鳥』に寄稿を始めた一九三一年当時、古典から広く題材を探していた姿が想像できます。

古典との関連については読者が後に古典の勉強をした時に、「こんな話を子どもの頃、読んだことがあったな」と気づけばよいのであつて、三郎は読者の子どもたちが、医師の忠告を素直に聞かなかつた三條中納言の行動のおかしさに気づいて笑つてくれたらよいと考えたのではないのでしょうか。三郎の兄森銃三も『瑠璃の壺』(1938年、三省堂)という中国の話を集めた本の序文に、基にした書物の名前を挙げて、大きくなつてから、それらの本を読んだ時に『瑠璃の壺』で読んだ話だと懐かしがってくれたらうれしいと書いています。古典を題材とする話の創作の態度として、兄弟でそういう話をしていたのでないでしょうか。

『赤い鳥』版では最後の一文は「じつをいふと、重秀が支那の名薬だと言つてもつて来たのは、薬でも何でもなく、たゞ赤土を鉄の汁でこね上げた出たためのものでしたのです」となっています。「帝国教育会出版部」版では「重秀はお邸を出ますと、尊い支那の名薬を溝の中へ捨て、歩き出しました」で終わっています。説明的な描写を省いて、「お分かりでしょうか」と茶目っ気一杯読者に語りかけているような気がします。

次回予定 二〇二二年三月十一日(金)午後一時半~三時半

「夕顔物語」の読み比べ(『赤い鳥』と少国民文芸選『かささぎ物語』)

「曼珠沙華」(『うぐいすの謡』1933年所収)